

2019
おもろ
チャレンジ

Nunamiut 文化とそれを取り巻く「豊かな世界」

農学部 3年

板原 彰宏

アメリカ合衆国

2019年8月16日-

2019年10月14日



渡航概要と内容

高校生の頃に星野道夫の写真集とエッセイに出会った。正直、エッセイや写真の言葉・世界を僕には理解、いや想像すらできなかった。そんなアラスカの小さな村で生きる人たちの暮らし、文化、食料とそれを取り巻く自然にどこか心惹かれていた。

今回の渡航はアラスカ内陸の村 Anaktuvuk Pass での Nunamiut の方々の暮らしとそれを取り巻く自然を見ることが目的であった。この村はカリブーの季節移動ルート近くに位置し、カリブーが現地の方の食を支えている。そんな方々の文化、食、ハンティングを見る事で星野道夫の言った「豊かな世界」を垣間見ることができると考えた。

・ 渡航内容

アラスカ・フェアバンクスについて3日目にクマ対策の食料ボックスを借りるため、ビジターセンターへ向かった。自分の行き先を告げると、その村に入る許可はとっているのか尋ねられた。そんなこと初耳である。Anaktuvuk Pass 付近の土地は村の持ち物であるから、許可なく入ると嫌がられるとのことである。村内に知り合いがいるわけでもなく許可を得るにも時間を要するため、Anaktuvuk Pass へ行くことは断念した。

ネイティブの文化・暮らしを見るにはどの村に行くのが良いか尋ねてみたがビジターセンターには明るい人がいなかった。ツアーとしてフィッシング、ハンティングをしている人のパンフレットを頂いた。そこに電話したら何か教えてくれるかもしれないと。Face to face の会話ならまだしも、電話での会話は(自分の英語力的に)困難であるとわかっていたので、日本人が運営し

ているアラスカのツアー会社に電話をして相談してみた。そういったネイティブの方々の暮らしについてはツアーもないのでネイティブの方に直接伺うのが良いとのアドバイスをいただき、ネイティブの方が運営しているオフィスへ向かい事情を話すと、毎年ユーコン川でサーモンをとり、ムースを狩っている方を紹介していただいた。その方のオフィスへ行き自分のしたいこと、見たいことなどを自分のつたない英語で説明すると、オフィスへ招いてくれアラスカのサーモン事情、文化、歴史について学ぶ機会を頂くこともできた。

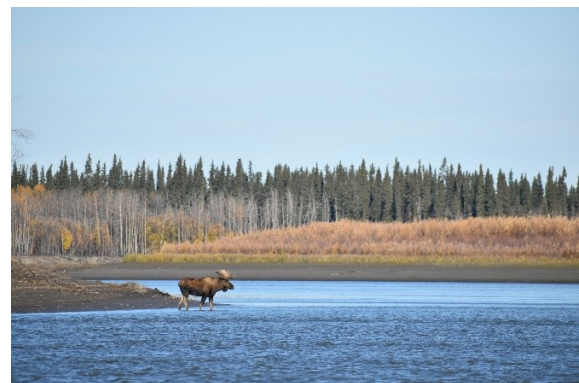
9月3日～8日

彼の友達がユーコン川沿いにあるキャンプへ行く際に、ついていかせていただけることになった。Fairbanks からユーコン川まで車で約3時間、そこからボートで約3時間川を上ってキャンプ場に着いた。そのキャンプというのは7月のサーモン漁の際、9月のムース猟の際などに拠点とする地で、キッチン、寝室、倉庫などがすべて手作りで建てられていた。ここで新しいキャビンの建設を手伝ったり、彼の故郷であるBeaver村へ行ったり、別の方のキャンプ場にお世話になったり、ユーコン川沿いの様々な場所もめぐることができた。この時の気温は最低5℃、最高20℃くらい。ユーコン川の水は非常に冷たく、それによりボートも冷やされる。その上、風が強い。出発前に暖かい服装を持っていくように念を押されていたのであるが、その注意がなければ船の中でずっと丸まっていないといけないところであった。



9月14日～22日

彼がムースハンティングに出かける際についていかせてもらえることになった。ムースとはヘラジカのことで肩高は1.8mほどまで、体重は400～800kgほどにもなる非常に大きな動物である。毎年9月中旬に自分のキャンプ場に行き、1週間ほどムースハンティングに出るのだそうだ。アラスカには約20万頭ものムースが生息しているようであるが土地も広大である。見つけるのはそう容易なことではない。時には道路わきやボートでの移動中に見つけることができて 2



日でハンティングが終わることもあるようであるが、見つからない時は1頭仕留めるのに20日ほどもかかったようである。今回はユーコン川沿いにある彼のキャンプを拠点としてムースを狙うことになった。ムースは朝方と日暮れ前に活動し、水を飲むために水場に出てくる。主にその時間帯を狙ってムースを探した。ボートから川辺にいるムースや新しい足跡を探したり、ボートから降りて池の周りや草むらを歩いて探す。時々ムースの肩甲骨を木にこすりつけて音を出し、その後ただ静寂の中ムースが出てくるのを待つ。15日の21時頃、ユーコン川の川岸に立っているムースをボートから発見。船を降りてそのムースを探し川沿いで隠れていたところを撃った。ムースは息絶え、それからその場で解体作業を行った。ムースは大きい。解体作業はかなりの時間を要し、肉を運ぶのもかなりの重さである。解体した肉をキャンプまで運びその肉を食べた。確実に目の前で野生として生きていた、その動物を今自分は食べている。「生きる」を感じた。そのことを感じるか感じないかは何か非常に大きな違いを人々の間に作り出すような気がする。



9月27日～29日

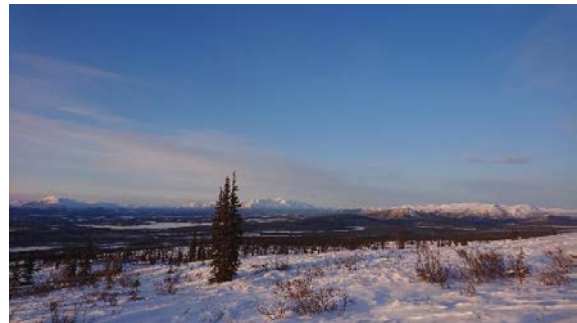
Minto という村で行われた potlatch に参加した。Potlatch というのはアラスカ・カナダ地域のネイティブが催すお祭りのようなもの。意味としては“gift giving feast”。亡くなった時、子供が生まれたとき、何か大切な記念イベントとして行われる。Minto 出身で偉大な功績を残された方が2009年に亡くなり、その Memorial potlatch として開かれた。日本ではお葬式と呼んでもいいのかもしれない。ただ、お葬式の意味が全く異なる。“celebrate their life”。これが potlatch だ。



Potlatch は歌と踊り、食事、gifts giving で主に構成されている。歌と踊りはいくつものパートに分かれていて、コミュニティーの魂であるとともに、亡くなった方への悲しみも垣間見ることができるものであった。Potlatch の食事にはムースヘッドスープが欠かせない。ムース、サーモン、ベリーといった現地でとられた食材を筆頭に西欧的な食事も参加者全員にふるまわれる。ムースの肉は働いた人から、サーモンヘッドは elder のみだとか、伝統的なしきたりも守られた traditional かつ spiritual な食事の時間であった。Gifts giving は驚くほどの量のギフトが用意されており、伝統衣装、ライフル、パドル、瓶詰にしたサーモンやベリー、ナイフ、コート、犬ぞり、ビーバーの毛皮、ブランケット、布、マルチツール、鍋、など伝統的なものから、現代的なものまで山のような量の gifts が準備されていた。Potlatch は Minto からだけではなく、様々な村からの参列者であふれていた。それはコミュニティー内の人々だけではなく、コミュニティー同士もつなげる、アラスカネイティブの方々にとって人同士をつなげる最も大切な儀式であるようだ。それと共に、コミュニティー独自の歌と踊りは老若男女すべてで構成され、一つの魂を作り出していた。

10月4日～10日

Arctic Village という村へ行った。この村は Gwich'in という民族の方が住んでいて、カリブーの民とも呼ばれている。というのも、人々の食事は大きくカリブーに依存しているからだ。この村は Porcupine Caribou という名前のカリブーの群れが季節移動に使う経路の近くに位置しており、カリブーが村の近くを通り過ぎる際に



ハンターたちが村全員のためにカリブーを仕留める。今回カリブーを見る事ができなかったものの、カリブーやムースの角や骨や皮とビーズを用いたアートや伝統衣装を見せていただけ、グレイリング釣りやカリブー肉の加工なども村の方々の御厚意でさせていただくことができた。この村の生活に欠かせない Porcupine Caribou を巡って今もなおネイティブ全体と議会は争っており、カリブーの子育て地となる北極海沿岸の土地の下にある石油をめぐって、開発を進めるか、カリブーを守るか、それはヒトの価値観の違いを浮き彫りにしている。石油開発により万が一カリブーの子育てに悪影響があったり、季節移動経路が変わってしまうとこの村の人たちは生活できない。すべての食品は Fairbanks の 3、4 倍ほどの価格であり、四輪車やボートを動かすにしても、ガスは\$10/ガロンである。その上、村での働き口は非常に限られている。現金収入がないのに、すべての物価が高い。しかし、そんな村での生活に人々は満足そうであった。厳しい寒さ、いつ来るか分からないカリブー、難しい現金入手、それにも関わらず人々の心は温かかった。それはカリブーという存在ゆえである。それを失うことは彼らにとってアイデンティティーを一つ失うこ

とと同義なのだ。

この村での滞在中、学校で日本語や日本について紹介する時間までいただけたのだが、日本について自分がどれほど無知かを思い知らされることとなった。歴史・仏教とその教え・武道・文化・政治・地理など、そもそも日本語で説明できないものを英語で説明できるわけがない。今回のような、あまり外部から人がやってこない地においては自分が日本人代表となりうる。そんなときに胸を張って確かな情報を説明できるくらいの知識はある程度持つておかないといけないと感じた。



渡航を通じて感じたこと・学んだこと

今回の渡航ではアラスカを見て感じるだけでなく、学ぶ機会もいただけた。アラスカは「ラストフロンティア」とよく呼ばれるが、ネイティブの祖先はこの大地を移動して暮らしており、自分が初めて通る地というものは実際ほとんどないのであろう。何千年も昔から様々な動物を狩り、サーモンやホワイトフィッシュをとり、ベリーを摘んで生活しており、その時代、土地は誰のものでもなくただそこにあるものであった。猟は必要となればいつでも行うことができ、サーモンも毎年大量に戻ってきた。しかし、コロンブス一行がアメリカ大陸にやってきてから数多くのネイティブは虐殺や新しい病気により亡くなった。その後ロシアの土地となり、アメリカに買収され、土地の所有を決められ、ネイティブの方たちは議席を持っていないため決定に意見することも出来ず、アウトサイダーが占める議会が通す法律に従うしかなかった。貨幣経済の波が押し寄せ、ベーリング海やユーコン川下流域でのサーモンの商業的利用により個体数の減少が深刻になっていたり(サーモンの漁獲量の97%が商業的利用、2%がネイティブによる食料利用、1%がスポーツフィッシング)、外部からのハンターが増すにつれムースへのハンター間競争が増していたり、規制によってハンティングの季節までも決められた。ネイティブの方々は常にアウトサイダーが決めるアウトサイダーのための法律に動かされてきた。今もなお、合衆国/州政府にネイティブの声はなかなか届かない。今、アラスカはアメリカ合衆国の一つの州であり、アメリカの利益のために利用されるのはある程度仕方のないことにも思う。しかし、アラスカにはコロンブス一行がやってくる前から歴史がある。ネイティブの価値観は異大陸からやってきた人の価値観とは異なる。“Live in Land”それがアラスカネイティブを表す言葉だ。自分たちのLandをよく知っているし大地を汚すことはしない。Landに敬意を払い、決して甘く見ない。彼らはどれほどLandが危険であふれているかを常に意識していた。常に正しい判断を心掛ける。大きなミスはもちろんで

あるが、小さなミスも積み重なればゲームオーバーだ。ユーコン川、アラスカの大地は彼らにとって冒険の場所でも、レクリエーションの場所でもない。生きる場所である。そして Land は彼らの spirits を作る。サーモン、カリブー、ムースは彼らの食料であるとともに彼らの魂ともなっている。その魂は歌や踊りでも表現されており、potlatch は魂の表現型であった。Land で生きるためには小さなコミュニティー内の協力が欠かせない。食料分配、年長者を敬い支え、年長者は Land で生きるための知恵を物語の中で次世代に受け継いでゆく。

“Live in Land”、自然と密接につながった歴史と暮らしはまさに「豊かな世界」であった。

今回の経験をどのように今後生かしていくか

今回、アラスカでは豊かな世界を見た。ムースやビーバーといった野生動物、誰も足を踏み入れたことがないのではとも思ってしまうツンドラ地帯、オーロラとフクロウの饗宴、自然と共に暮らすヒト。やはり自分の想像を超えた世界であった。星野道夫は著作の中で自然には2つの種類があるといった。吉田山、大文字山、鴨川、街路樹といった身近な自然。アラスカ、アマゾン川、アフリカの熱帯林といった想像上に存在する自然の2種である。このうち人々の心を穏やかにするのは身近な自然であり、夢を抱かせ心くすぐるのは想像上の自然だろう。僕にとって想像上の自然であったアラスカの自然は今、地球温暖化の影響だけではなく、貨幣経済、オイルマネー、合衆国/州政府から脅威に立たされている。

アラスカには人々の想像を超えた世界がある。その世界をありありと伝えたい。今、この瞬間にムースを狩っている人がいる、サーモンが川を上っている、オオカミが吠えている、グリズリーが子育てをしている。そんな当たり前であるけれど、実感を伴わない想像にリアルな感動を提供してみたい。それはその人の幸せに結びつくかもしれない、環境保護につながるかもしれない。科学技術の発達により、写真や動画だけではなく、表現方法も増えてきている。想像上の自然が現実にある不思議さ、その素晴らしさを感じてもらうにはどのような表現ができるのか考えていきたい。

本プログラムでの渡航を考えている学生へのアドバイス

今回、自分は現地に知り合いや受け入れてくれる方がいない状況で出発した。幸い、助けられる方に出会い、貴重な体験ができたが、自分はただただ幸運であった。おもろチャレンジはチャレンジングな企画も支援して下さるが、日本にいる間に可能な限り不安要素をなくしておくことが大切だと思います。メールはほとんど返信がなかったので、可能なら電話をかけてしまうのが確実かなと。

■ 主な奨学金の使途

*渡航費、超過荷物料金

*宿泊費

*海外旅行保険 など